みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Estudio del impacto de desarrollo turÍstico en la AmazonÍa Ecuatoriana : El caso de la sociedad de los huaorani

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千代, 勇一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002092

エクアドル・アマゾンにおける観光開発のインパクト：ワオラニ社会の事例研究

千代　勇一
（総合研究大学院大学文化科学研究科）

Estudio del impacto de desarrollo turístico en la Amazonía Ecuatoriana: El caso de la sociedad de los huaorani

Yuichi Sendai
(The Graduate University for Advanced Studies)

本論文では、エクアドル・アマゾンの先住民であるワオラニの人々がエコツーリズムに参画する際に生じる諸問題を論じることを目的としている。

近年、自然環境の破壊によって、持続可能な開発としてエコツーリズムが世界的な注目を集めている。エクアドルのアマゾンにおいても、石油開発に代わる「もう一つの」開発として1970年代から観光開発が行われてきた。

ワオラニの人々は、ガイドや荷役労働者としてエコツアーに参画し、仕事に応じて旅行会社から現金収入を得ている。そこからもたらされる現金収入は、ワオラニ社会内部に経済格差を生じさせ、社会構造の変容を引き起こしている。その一方で、旅行会社がエコツーリズムのすべての過程を管理しているため、ワオラニの人々と旅行会社の不平等な関係を変えることは困難である。つまり、ワオラニの人々のエコツーリズムへの参画は外部世界への従属を意味している。

しかしながら、エコツーリズムの運営は必ずしも多くの資本を必要としないものである。もし、旅行会社や政府に従属することなく、ワオラニの人々自身が決断し、エコツーリズムを企画し、彼らの土地で運営するのであれば、エコツーリズムはワオラニの人々と外部世界との不平等な関係を変えることができる可能性を秘めている。

En el presente artículo se pretende discutir los problemas que tienen los huaorani(la indígena de amazonía ecuatoriana) cuando participan en la actividad de ecoturísmo. Reciéntemente, debido a la destrucción de naturaleza, el ecoturísmo llama la atención mundial como el desarrollo sustentable. En la Amazonía ecuatoriana, desde la decada de los años setenta empezó el desarrollo ecoturístico como el desarrollo alternativo en lugar de la explotación petrolera.

Los huaorani trabajan como guías ecoturísticos o cargadores de equipajes y las agencias de viajes les pagan salario de acuerdo a sus trabajos. Este salario causa diferencia económica y cambio en la estructura social. Por otra parte, como las agencias de viajes controlan todo el proceso de ecoturismo, es difícil que se cambie la relación desigual entre los huaorani y las agencias de viajes. Por consiguiente la participación de los huaorani en ecoturísmo significa subordinarse al mundo exterior.

Sin embargo, el manejo de ecoturísmo no siempre exige gran capital. Si los huaorani mismos deciden, planean y manejan ecoturísmo en su tierra sin subordinarse a las agencias de viajes o gobierno, hay posibilidad de que el ecoturísmo cambie esta relación desigual entre los huaorani y el mundo exterior.

1. はじめに
2. エクアドルにおけるエコツーリズムとアマゾン開発の歴史
3. ワオラニ社会と外部社会
4. ワオラニ居住地におけるエコツアー
5. エコツーリズムと開発
6. エコツーリズムへの従属
7. エコツーリズムによるワオラニ社会の変容
8. おわりに

Key words : ecoturísmo, impacto de desarrollo turístico, Amazonía Ecuatoriana
キーワード:エコツーリズム, 観光開発のインパクト, エクアドル・アマゾン

1. はじめに

エクアドル・アマゾンでは近年, 先住民居住地においてエコツアーが盛んにおこなわれている。この背景には, 1980 年代に顕著となったアマゾンにおける環境破壊に対する国際的な関心の高まりとともに, エクアドル・アマゾンの先住民がこれまでの石油開発からの脱却を図るために積極的にエコツーリズムを導入し始めたことがある。エコツーリズムは自然環境の保全とともに, 地域社会の経済振興が不可欠とされる (Ulloa 1993)。しかし, 自然環境の保全も「持続可能な開発」もエクアドル・アマゾンの先住民社会にとっては外部世界の概念であり, 先住民居住地では環境保護と地域開発の名のもとに様々な問題が引き起こされている。

本論文では, まずエクアドルにおけるエコツーリズムとアマゾン開発の歴史を概観し, つづいて, エクアドル・アマゾンにおけるエコツーリズムがそこに居住する先住民の社会にとってどのような意味をもつかを, エクアドル・アマゾンで行われるエコツアーのなかでもっとも先住民の関与が深いワオラニ居住地で行われるエコツアーを事例として考察する。

2. エクアドルにおけるエコツーリズムとアマゾン開発の歴史

エクアドルにおけるエコツーリズム・プロジェクトの始まりは，1969年にメトロポリタン・ツーリング社によって行われたガラパゴス諸島における環境の保全を強調したツアーであるといわれている（Smith 1996a）。ガラパゴス諸島は，1832年にエクアドルの領土となる以前から人間が訪れた形跡があり，17, 18世紀には海賊や捕鯨船の飲料水，食料の供給地として，エクアドル領となってからは徒刑地として使われてきた。1964年になるとサンタ・クルス島にチャールズ・ダーウィン研究センターが設置され，主にガラパゴスゾウガメの保護がおこなわれるようになった（ユネスコ世界遺産センター 1996）。ユネスコの世界遺産に登録されたのは1978年になってからであるので，メトロポリタン・ツーリング社はその約10年前から自然環境保全を重視したツアーをおこなっていたことになる。ガラパゴス諸島はダーウィンの進化論の根拠となったということも手伝って多くの観光客が集まり，それにともなってエクアドル本土からも多くの人々が移住するようになっていった。移住者はガラパゴス諸島にはいなかった家畜を持ち込み，それらの一部は野生化して，ガラパゴス諸島に与える生態学的ダメージは深刻なものとなっている。観光客と移住者の増加もまた，ガラパゴス諸島の生態系に被害を及ぼしている（ユネスコ世界遺産センター 1996）。

一方，アマゾン川は航海士V・ピンソンが1500年に「発見」したが，本格的なアマゾンへの進出は1541年に始まるゴンサロ・ピサロとフランシスコ・デ・オレリャーナによる遠征である。彼らは，当時ヨーロッパで珍重されていたシナモンの獲得と黄金郷の発見を目指していたのである。結局，シナモンも黄金郷も発見できなかったが，オレリャーナは現在のブラジルに位置する河口に到達し，アマゾン川全体を「発見」することとなった。オレリャーナが遠征に出発した場所は，現在のプエルト・デ・フランシスコ・オレリャーナ市であり，一般にコカと呼ばれるエクアドル・アマゾン最大の石油開発とエコツーリズムの拠点都市のひとつとなっている。

1940年代になると，エクアドル・アマゾンでは石油の採掘が始まり，多くの先住民居住地がその開発の影響を受けることとなった。初期には石油会社と先住民の間に多数の死者を出す争いがある一方で，パイプラインの敷設や油井の建設に多くの先住民が労働者として参加し，各地に石油関連施設ができていった。このときに参加した先住民はすでにキリスト教に改宗しており，定住化などによって生業活動に大きな変化が生じていたが，現金収入と外部から入ってくる商品に強く依存していくようになっていった。

しかし，油井から流れる原油による河川の汚染がアマゾンの自然と先住民の人体に大きな影響を及ぼしていることが問題化するにつれて，石油開発からの脱却と自然環境の保全の必要性が訴えられていった。このような状況下でアマゾンにおいてエコツアーが開始されるよ

うになり，多くの先住民集団がエコツアーを歓迎するようになっていった。

動植物が豊富で，緑の地獄として知られたアマゾンは，それまでにも多くの探検家を引きつけたものの，一般の観光客が入っていくにはアクセスや危険の問題が山積みしていた。しかし，宗教団体によるアマゾン地域の先住民の布教活動や石油開発による道路や滑走路などのインフラの整備によって，アクセスの問題や先住民との衝突などの問題が解決されるようになると，各地でエコツアーが行われるようになったのである。エクアドル・アマゾンにおけるエコツーリズムは1976年にナポ川のリモンコチャにおいて始まるが，この地ではまだ石油開発はおこなわれておらず，プロテスタント系の夏期言語研究所（Instituto Lingüistico de Verano）による布教活動の最中であった（Smith 1996a）。初期に成功を収めたプロジェクトとしては，ナポ川近くのラグーン周辺でのエコツーリズム・プロジェクト「ラ・セルバ（La Selva）」が挙げられ，このプロジェクトでは旅行会社と先住民のキチュアが取り決めを結び，宿泊施設を設置している（Smith 1996a）。

3. ワオラニ社会と外部社会

ワオラニ（huaorani）とはワオラニ語で「人間（複数形）」を意味しており，同じく「人間（単数形）」を意味するワオ（huao）も集団の呼称として用いられている。彼らのテリトリーは，北はナポ川から南はクラライ川に広がり，約 1300 人が居住している（Mondragón and Smith 1996）。

ワオラニと外部社会との最初の接触は1600年代後半であり，友好的に始まった接触もその7年後には暴力に変わったという（Blomberg 1996）。1875年から1925年の間の天然ゴムブームの際には，現在のペルー・アマゾン最大の都市であるイキトスや同じくブラジルのマナウスの奴隷市に売られていったこともあって，ゴム採取人や外部者に対して敵対するようになった。

1937年にワオラニ居住地での石油開発が始まり，60年代，70年代を経て多くの石油会社がワオラニ居住地での石油採掘に従事するようになっていく（Narváez 1996）。

1955年には夏期言語研究所と航空伝道協会（Asociación Misionera de Aviación ）はクラライ川周辺に居住するワオラニとの接触を試みる「アウカ(Auca)」作戦を開始した。アウカとは，エクアドル先住民のキチュア語で「未開」，「野蛮」を意味しており，現在では先に示したように人間を意味する「ワオラニ」が一般に用いられている。翌1995年には作戦に参加した5人の宣教師が殺害された（Mondragón and Smith 1996）。しかし，1958年，先の犠牲者の姉妹であるラケル・セイントと同じく犠牲者の妻であるエリザベス・エリオットによる布教活動は，ワオラニの女性であるダユマの力も借りて平和的に行われた。この当時のワオラニの人口は約

500 人で, 4 つのグループに分かれて生活していた（Yost 1981）。そして 1970 年には夏期言語研究所は飛行機の使用とラジオ送受信機の投下などによって, 森林の中を移動する孤立したワオラニの集団との接触を試みている。

こうした布教活動によって, これまで行われてきた襲撃や嬰児殺しなどが禁止され, また保護地域における定住生活が行われるようになり, 人口が増加していった。定住と人口の増加によって狩猟採集による生活の維持が困難となり, 外部社会との関係が強くなっていった。ジェームズ・ヨストは夏期言語研究所の布教活動によるワオラニ社会の変容を分析しているが, 石油会社とツーリストによる急速な社会変容も示唆している（Yost 1981）。

1976 年になると, 政治力を失ってきたワオラニの女性リーダーが, ツーリズムの導入によって統制力を回復しようとしてツアーを開始した（Yost 1981）。しかし最初のツアーは「未開の先住民」を見に行くといった趣向のものであり, 1979 年に行われていたツアーのガイドは「アウカの女王に会いにおいで(Venga a visitar a las Reinas de Aucas)」という宣伝文句を用いていた（Smith 1996b:42）。同じ時期にワオラニの居住地でツアーを開始し, 現在も継続して行っているのが, 次に紹介するA社である。

4. ワオラニ居住地におけるエコツアー

エクアドルの首都キト市にある旅行会社A社は, ワオラニの集落B村と契約を結んでエコツアーを実施している。集落ぐるみでワオラニの人々と大規模なツアーを実施している旅行会社はワオラニ居住地では他になく, 事実上この地域のエコツアーを独占している。それは, 現在の経営者であるC氏の祖父の代から 3 代に渡って友好関係を築き, 彼自身も 12 年間のつき合いがあるためであるという。A社の目的はもちろん観光業によって収入を得ることではあるが, 同時にワオラニの人々に持続的な経済支援をするためであると標榜している。以下, A社の代表的なツアーの紹介をする。

まず, 旅行者はアマゾンの中核都市であるコカ市まで 10 時間ほどかけて夜行バスで向かう。翌朝, コカ市内のホテルに集合し, ここでツアーに参加する旅行会社の契約社員, 料理人と合流する。契約社員と料理人はアンデス高地またはアマゾン低地の他の都市出身者であることが多い。

参加者が集合すると, A社がチャーターした観覧バスで 2 時間かけてワオラニの集落B村を目指す。バスはB村まで舗装された道路を走るのであるが, この道路は石油開発のために造られた道路である。道路の脇にはパイプラインが敷設されており, また途中には石油精製施設を見ることができる。

2 時間ほど走るとバスは軍の駐屯地に到着し，すべての旅行者は軍のチェックを受けることとなる。駐屯地はワオラニ居住地との境界である川のほとりにあり，そこにかかる橋を超えるとワオラニの居住地に入るのである。ワオラニの居住地は，1990 年に 679,130 ヘクタールが保護区として政府によって認められ，エクアドル最大の先住民居住地となった（Rival 1999）。この居住地にはワオラニの人々以外の許可なしの立ち入りを禁止している。川を越えて 15 分ほど歩いたところにワオラニの集落のひとつB村があり，A社のツアーはこの集落と契約を結んでいる。内容は，旅行者がワオラニの居住地内を通過することを許可する見返りとして，旅行者一人につき 20 ドルを集落に納めるということ，そしてツアーにはB村のガイド，カヌー操縦や荷物運びのための人員を同行させ，現金を支払うというものである。集落内で平等に現金収入があるように，ツアーに同行する人員はローテーションであらかじめ決定されている。

旅行者は川を渡った船着き場でバスを降り，ワオラニのガイドと荷物運びの人々と合流してから，船外機のついたカヌーでA社の所有する宿泊施設を目指す。A社は船着き場に船外機付きカヌーを所有しているが，旅行者や荷物が乗り切れない場合は，B村のリーダーであるD氏の所有する船外機とカヌーを借りることになる。B村では日常生活に船外機付きカヌーを使用することはないが，A社がもともと所有していた船外機をエコツーリズムのために払い下げてもらったのである。しかし，それを購入するだけの現金をD氏はもっていないため，お金の支払いはこのような船外機の貸し出しの際に差し引かれているという。

宿泊施設に着いてからは様々なアトラクションが用意されている。1 日目にはワオラニのガイドが森林を案内し，薬用植物の用法や野生動物を呼び寄せるための擬声を紹介する他，夜には夜行性の動物，昆虫の観察がある。2 日目には川を下っての森林散策，ピラニア釣り，ワニの観察を行う。食事は同行の料理人が，コカで仕入れてきた食材を使って調理するため，ワオラニの食事を体験するということはなく，たとえばスパゲッティ，スープ，コーヒーといった食事をとることとなる。旅行者もとくにワオラニの食事に関心があるわけではなく，料理人はそうした旅行者の需要に応えるために他の地域出身者が同行しているのである。ツアー同行のワオラニのガイドから聞いた話では，彼の参加したガイド養成講座には外国人旅行者の喜ぶ料理，すなわち西洋風の料理の実習が講座に組み込まれているとのことである。

アトラクションで人気のあるものは，ワオラニのガイドの説明のついた森林散策であるが，ワオラニのガイドによると外国人旅行者が関心をもつ動植物の種類やその説明の仕方をすでにガイド養成講座で習得しているという。実際に，野生動物の見学あるいは写真撮影を目的としてくる旅行者が多く，期待していたほどの動物が現れない場合には旅行社やガイドに対して不平を述べることも少なくない。

このようにしてキャビンで 3 日ほど過ごしたのち，同じ経路を通って船着き場に戻ってくる。行きと違うことは，B村の人々がお土産を売りにやってくることである。たとえば，ミニチュアの吹き矢やヤシの葉の繊維で編んだ小物などを入れるための袋などである。しかし，前述のとおり旅行者の目的が野生動物の観察であるため，これらの民芸品が売れることはまれである。

その後，観覧バスがコカから次のツアー客を運んでくると，キャビンから戻ってきたツアー客が観覧バスに乗り込んでコカへと帰っていき，これまでツアーに同行していたワオラニの若者たちは，再び新しいツアーに同行するためにカヌーに乗り込んでいく。A社の経営者から聞いたところによると，B村では荷役などの労働に加わることを望む人が少なくなったため，ローテーションを同じ人々，とくに若者たちでツアーをまわしているという。B村で聞いたところによると，狩猟採集を主な生業としている人々にとって，決まった時間を拘束されることが耐え難いとのことである。

5. エコツーリズムと開発

エクアドル・アマゾンでは，エコツーリズムという名目で観光活動がおこなわれている。アマゾンでのツアーによって，旅行者に自然環境を保全する意義を教育する効果があるためである。参加する旅行者も野生動物を見ることを目的としているものが多い。

しかし，このような旅行者の志向が，アマゾンにおけるエコツーリズムのあり方に大きな影響を及ぼしている。つまり，野生の動植物を見るということがアマゾンにおけるエコツーリズムであるということである。そもそも，アマゾンにおけるツアーがここ数年で盛んになってきたのは，多くの旅行者や移住者によって生態系が乱されてきているガラパゴス諸島だけではもの足りず，アマゾンまで足をのばす旅行者が増えてきたからであるとA社の経営者は述べている。また，アマゾンにおいて比較的早い時期から観光開発の始まったテナやミサワジといったアマゾン・ツアーの拠点周辺から野生動物が激減しており，外部者の立ち入りを禁止してきた先住民居住地がツアーの対象となってきていることも，旅行者の野生動物志向の強さを物語っている。したがって，野生動物が少ない先住民居住地ではエコツアーの運営が困難であるといわれている（Smith 1996a）。

旅行者は手つかずの自然を求めており，野生動物はその象徴といえる。このような旅行者はアマゾンの「発見」以降行われてきた開発を否定し，いまだ人間の手の及ばない野生動物の残る自然をそのままの状態で保護することを主張するかもしれない。あるいは環境を保護しつつ，経済的な利益を生むような「持続可能な開発」を訴えるかもしれない。しかし，アマゾンは人間の手垢の付いていない世界ではなく，「発見」以後の開発が行われる以前から先

住民によって利用されてきたのである。そして，「持続可能な開発」は古谷嘉章が指摘するように「先進国の市場における商品価値だけを強調し，現地の不平等な社会・経済構造はそのままにして，天然資源のプラントとして工場化し，地球規模の自然環境の存続だけを優先してローカルな社会の存続を周縁化することになってしまうのであれば，せいぜい従来通りの環境破壊的な開発モデルの緑色のアクセサリーにとどまってしまう危険がある」（古谷 1999b:107）と言える。

エクアドル・アマゾンにおけるエコツーリズムは，自然の普遍的な価値を強調するあまり，人類の宝という大義名分のもとで聖域化し，ローカルな問題を隠蔽する恐れもある。また，これまでの開発と同様に住民が無視され続けるという状況が継続する可能性がある。現在のエクアドル・アマゾンで行われているエコツーリズムが「持続可能な開発」であるとするならば，少なくとも先住民社会にとっての「持続可能」でないことだけは確かである。

6. エコツーリズムへの従属

エコツーリズムの導入は，先住民社会が無視され続けることではなく，否応なく外部社会に従属することを意味している。前述のワオラニ居住地におけるエコツアーで述べたとおり，エコツーリズムの導入とともに旅行会社だけでなく，先住民社会も資本投下をする主体となっている。具体的には，ガイド養成講座を受講する費用やガイド資格を得る費用，船外機の購入などである。ひとたび資本投下が行われると，それを回収し，さらには利益をあげるために，積極的にエコツアーを運営していく必要がある。とくに船外機に関しては，先に述べたとおりB村の日常生活において用いられることがなく，支払いが賃貸時の支払いから差し引かれるため，エコツアーから離れることができない構造となっている。

ガイド資格に関しては，たとえ専門知識と資格を有していても，集落が観光客の集まるコカの町から 120 キロも離れており，B村が単独で観光客を獲得することは困難である。インターネットやパンフレット，ポスターなどによる宣伝活動に不慣れで，キトやコカに代理店を構えることが経済的に困難である以上，そうした活動の専門家である旅行会社と提携する必要がある。しかも，ガイド養成講座や船外機などに投資した資金の回収が旅行会社を通してのみ可能であるため，その関係は対等なものではなく，従属関係になってしまうのである。

また，実際にツアーの運営を行う人々，たとえば料理人やガイドの多くはアマゾンの都市部に居住する人々であり，収益の一部は彼らの給与となる。これは，旅行会社にとって，彼らのやり方を熟知している人々を雇用するほうが，彼らのやり方を十分には習得していないワオラニの人々を使うよりトラブルが少ないからである。このような仕組みではエコツーリズムによる利益が現地社会に十分に還元されることはない。

経済的なもの以外にも従属関係を見ることができる。エコツアーにおいて，外国人旅行者は興味深い野生の動植物を見ることを期待しており，ワオラニのガイドは彼らが望むものを見せることが期待されている。どのような動植物が外国人旅行者にとって価値があるのかといった知識は，ガイド養成講座によって習得されるものであり，西洋の自然科学に基づいた知識である。この知識は現金収入を生み出すものであるため，価値のあるものとして学ばれていく。

エコツーリズムがそこに存在する野生の動植物などのエコロジーの保全が目的である以上，その目的を達成することができるかもしれない。しかし，エコロジー自体は西洋世界で作られた概念であり，ワオラニの人々の自然観とは異なるものである。エコツーリズムが現金収入を生み出すことによって，西洋のエコロジーの概念が急速に受容されている現状は，西洋の自然観にワオラニ社会の自然観が従属しているとも考えられる。

7. エコツーリズムによるワオラニ社会の変容

従来のマス・ツーリズムにおいては旅行者と旅行会社の利益が重視され，地域社会に与える負のインパクトが生じてきたため，地域社会参加のツーリズムの重要性が求められるようになってきている。しかし，この地域社会の参加は雇用機会や現金収入の増加がある一方で，当該社会のありように大きなインパクトを与えている。

ワオラニ社会においてもツーリズムへの参加は深刻な社会変容を促している。それは，貧富の格差の拡大である。狩猟採集を主な生業としていたワオラニ社会では，動植物資源や土地はすべて共有されており，私有の概念がなかったという（E-shen 1999）。ツーリズムが盛んな現在においても，川での漁労や森林での狩猟は自由に行うことができる。しかし，ツーリズムによる現金収入は分配されることなく個人に帰属し，これが貧富の差の源となっている。確かに前述のとおり，ツーリズムに関わる労働はローテーションによって集落内の人々すべてが平等に参加することになっているが，ガイドの資格のあるもの，船外機付きカヌーを所有しているもの，スペイン語を解するものなどはより多くの収入を得る機会があり，さらに労働の観念の違いからツーリズムに従事することを拒むものもでてきている。

こうした現金収入の偏りは，さらなる問題を引き起こしている。つまり，ガイドの資格を得たりスペイン語を習得するためには，キトやコカをはじめとする大都市に出ていくことが必要であり，現金収入の多い世帯のみがそれを可能とし，ガイド資格やスペイン語習得によってさらなる富を生みだすことが可能となるのである。このように無限に増殖する富は，集落内に決定的な経済格差を生じさせ，これまでの社会のありように変化をせまるのである。また，スペイン語の習得は現金収入に直接結びつくというだけでなく，ワオラニ社会の外の情

報を入手することや外部社会との交渉に不可欠なものである。エコツーリズムによってエクアドル国内だけでなく，国外の人や物の流れにさらされている今日，情報を入手し，交渉を行うことができるということが，権力と直接結びついてきている。そのため，スペイン語を理解する若者が集落の政治的リーダーになるといった現象もおきている。エクアドル・カトリカ大学のフラビオ・コエージョ教授との面談でも，エクアドル・アマゾンの他の地域においても，このようにスペイン語を解したり，カヌーを所有する一部の人間がエコツーリズムによる富を独占するということがおきており，従来の政治的リーダーシップに対する新たな勢力となって集落を二分する争いも起きているとの指摘があった。

さらに，現金収入の偏りは個人間のみならず，集落間においても深刻な問題を引き起こしている。現在，ワオラニ居住地には18の集落があり，そのうち12の集落がエコツーリズムへの参加を望んでいる（Smith 1996b）。しかしながら，すべての集落がエコツアーを実践できるわけではない。旅行者のアクセスが比較的しやすいことや旅行会社にとっての都合がいいことなど条件が異なっている。B村は石油開発に際して作られた舗装道路ビア・アウカの終着点にあり，また旅行会社がワオラニ居住地に隣接する土地に建設した宿泊施設にもっとも近いところにあり，B村からカヌーで 3 時間ほどで行くことができるという利点があるため，多いときは毎週 2 組のエコツアーを受けることができる。しかし，そのようなファシリティのないE村はエコツーリズムの導入を望んではいるものの，実際に誘致することは困難である。したがって，B村とE村の経済格差は広がり，E村はB村を妬み，この2つの村は敵対関係にあるという（Smith 1996b）。

8. おわりに

アマゾンではその「発見」以来，様々な資源を求めて開発が行われた結果，深刻な環境破壊に直面している。そうした中で，「持続可能な開発」方法としてエコツーリズムが注目され，先住民居住地において実践されている。

エコツーリズムは，それまでの石油開発などから脱却する手段でありながら，逆にアマゾン先住民社会が西欧世界，あるいは資本主義世界にさらに深く取り込まれていく契機となっていることがワオラニ社会の事例から明らかになった。

また，エコツーリズムは環境保護の教育的効果を目的としているが，利益を生むことが期待される経済活動である。先住民社会はこの経済活動の末端で搾取されるだけでなく，そこから逃れることが困難な状況にさえ陥る可能性がある。その際，先住民社会の内部には急激な社会変容によって様々な対立が生じることも明らかになった。

エクアドル・アマゾンの先住民居住地の抱えている問題は，古谷嘉章のいう「ある特定の近代化の様式がヘゲモニーを握っているなかで形成されてしまった不平等な相互連結を，どのように別の仕方で連結しなおすかという問題」（古谷 1999a:235）であり，エコツーリズムがそれを解決する手段となりうるかということが問われているのだが，現在エクアドル・アマゾンでおこなわれているツアーを見る限りでは，不平等な連結は環境保全や地域開発という名によって隠蔽されながら加速しているかのように思われる。

しかしながら，それはエコツーリズムが問題解決の手段となり得ないということを意味しない。エコツーリズムはこれまでの開発とは異なり，大規模な資本なくしても，いいかえれば，先住民主導で行うことができるからである。エクアドル高地においては，セロ・ゴロンドリーナス・プロジェクト（Cerro Golondrinas Project）というエクアドル高地の環境保護を目的とした非政府団体によるエコツアーが実施されている。この活動の特徴は，自らが所有する土地でエコツアーを行い，その収益を環境保護のための土地購入費用に充てていることである。彼らは旅行会社や政府が関与することによって一貫した環境保護活動ができないと考え，環境保護とエコツアーのための用地収用，ツアーの企画，運営などを自ら行っている。旅行会社の関与によって利益優先になるおそれがあり，また国家の政策はその時々の状況に応じて二転三転するためである。同じことは，エクアドル・アマゾンにおいてもみられる状況である。つまり，旅行会社や政府が主導してきた開発が不平等な連結の一因となってきたことは明らかである。

エクアドル・アマゾンの先住民がたとえ小規模であっても自らの主導によってツアーを企画・運営するのであれば，これまでのエコツアーとは異なる結果が期待できる。自律的なエコツアーの実施，つまり自らが生活する土地で，自らが行動を決定し，実践し，責任を負うということが実現されるならば，不平等な連結から解放される第一歩になりうるはずである。

文　献

Blomberg, Rolf

1996　*Los Aucas Desnudos*. Quito: Abya-Yala.

E-shen, Flora Lu

1999　*Changes in Subsistence Patterns and Resource Use of the Huaorani Indians in the Ecuadorian Amazon* (PhD Dissertation).　Ann Arbor: UMI.

古谷嘉章

1999a「開発のなかのアマゾン」清水透編『<南>から見た世界 5：ラテンアメリカ』pp. 20, 大月書店.

1999b「すばらしき開発の言説」『現代思想』27(12):98-109.

Mondragón, M. L. and R. Smith(eds)

1996 *Bete Quiwiguimamo: Salvando el Bosque para Vivir Sano.* Quito: Abya-Yala.

Narváez, Iván Q.

1996 *Huaorani vs. Maxus: Poder Étnico vs. Poder Transnacional.* Quito: CECS.

Rival, Laura M

1999 The Haorani. In R. B. Lee and R. Daly(eds.) *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers,* pp. 101-105. Cambridge: Cambridge University Press.

Smith, Randy

1996a *Manual de Ecoturismo para Guías y Comunidades Indígenas de la Amazonía* Ecuatoriana. Quito: Abya-Yala.

1996b *Drama Bajo el Manto Amazónico*(2da.Edición). Quito: Abya-Yala.

Ulloa, Roberto V.

1993 El Ecoturismo Como Alternativa Viable Para la Conservación de los Recursos Naturales del Ecuador. In L. M. Ruiz(ed.) *Amazonía: Escenarios y Conflictos*, pp. 391-397. Quito: Abya-Yala.

ユネスコ世界遺産センター

1996 『ユネスコ世界遺産2 中央・南アメリカ』講談社.

Yost, James A.

1981 Twenty years of Contact: the Mechanisms of Change in Wao ("Auca") Culture. In Norman E. Whitten, Jr. (ed.) *Cultural Ttransformations and Ethnicity in Modern Ecuador*, pp. 677- 704. Urbana:University of Illinois Press.

【付 記】

本研究は，日本科学協会の笹川科学研究助成（平成12年度「エクアドル・アマゾンにおける持続可能な観光に関する調査研究」）によるものである。また，調査においてはキト市在住の松本明修氏にお世話になった。記して，深甚なる謝意を表しておきたい。